

東晋初頭政権の性格の一考察

矢野主税

序

東晋政権が、北方出身官僚と江南官僚との協力の上に築かれてきたものであることについては、改めていうまでもない。けれども、この両者の関係についての具体的な姿については、例えば、晋書⁽⁵⁸⁾周処伝、魏の条に、「時中国区官失守之士。避乱来者。多居頭位。駕御呉人。呉人頗怨。」とみえる如く、北人官僚が江南官僚を抑圧して、初めから優越的地位を占めたとするものと、南齊書⁽³³⁾張緒伝に、王儉の言葉として、「晋氏衰政。不可以為準則」と述べられているところにもみる如く、東晋政権は江南官僚を優遇して、北人側からみれば、必ずしも盛政とは考えられないとする意見^{(拙稿「南人北人対立問題について」(長大史学第三輯))}とが見られる。更に、両者の調和的存在を説く顔氏家訓^(渉務篇11)の、「晋朝南渡、優借士族。故江南冠帶、有才幹者。擢為令僕。以下、尚書郎、中書郎、中書舍人已上。典掌機要。」という如き見解もある。

当初の東晋政権は流寓政権であるが故に、江南諸有力氏族の支持なくしては維持できなかったことは、既に学者の説くところであるが^(守屋英郎「南人北人」東亞論叢第六輯及び越智民「東晋成立に至る過程について」東洋学報33の3、4)、例えば、晋書⁽⁶⁾元帝紀に、「永嘉初用王導計始鎮建鄴。以顧榮為軍司馬。賀循為參佐。王敦、王導、周顒、刁協並為腹心股肱。賓礼名賢。存問風俗。江東婦心焉。」とある如く、北人官僚と江南代表名族出身官僚との協同が東晋初頭からみられることは、東晋政権が江南有力氏族の支持の上に立っていたことを物語るものであるう。

勿論、前引周処伝の記事は元帝時代のことであって、これら呉人の怨望は、直接的には王導、刁協等北人の専政に対するものであったこと

東晋初頭政権の性格の一考察

は、周処伝^(晋書)魏の条に、魏が叔父周札の名をかりて兵をつのった時のことを、「以討王導、刁協為名。」し、それに対して、呉人が、「翕然附之」といわれていることでも明かであろう。それに対して王儉の言葉は、東晋一代に江南官僚にして有力な地位にのぼった人々のあったことに對しての、北人側からの非難である。従って、この両者は、時期的に多少ずれたものであって、その内容は全く相反するかの如く見えながら、実は必ずしも矛盾するものではない。ということは、東晋初頭においては北人官僚の優越が顕著であったとしても、その後においては、江南官僚はそれほど抑圧せられていたわけではなく、寧ろ北人官僚側からみれば、東晋は南人優遇の時代であったと見られていたことを示すものといえよう。

併し乍ら、上述の如き諸見解は何れにせよ東晋政権における官僚としての地位が問題とされているわけであって、東晋政権はその初頭から、江北或は江南の有力官僚によってのみ支持されてきたかの如き錯覚を起こさせる。筆者の見解によれば、少くとも東晋初頭の政権はもっと巾の広い支持を、江南、江北の一般人士に対して求めていたとすべきであると考え。この点を見落とす、単に上層階層の権力移動によって、或は北人官僚が呉人を駕御したという、或は東晋政権は江南貴族を優遇しすぎたという如き意見がでてくると思われる。では、元帝は一体どのような広い支持を、江北、江南両士人階級に対して求めたのであろうか。

(一)

そのことを明かにする前に、先ず東晋政権の性格の一面を知る為に、天子をとり巻く有力官僚について一言しておきたい。明帝紀^(晋書)をみる

に、「當時名臣、自王導、庾亮、溫嶠、桓彝、阮放等。咸見親待。」とあるが、當時とは明帝が皇太子の時であるので、これらは元帝時代に明帝に親待せられた人々であつたようである。彼等は又、元帝にも親待せられていたこというまでもないが、元帝政権の支えとなつた人々は勿論これらに止まることなく、江北人士には、刁協、周顒、劉隗の如きが、江南人士には、元帝が晋王になる以前に死んだ顧榮を始めとして、紀瞻、薛兼、賀循、陶侃、戴若思、周訪等があつたことは、元帝紀並びに各人の本伝に明かである。従つて、東晋初頭には南人も亦北人と交らず政権の支えとして重要な働きをしていたと見てもよいであらう。然るに明帝紀⁽⁶⁶⁾太寧三年の条によるに、「壬午。帝不豫。召太宰西陽王業、司徒王導、尚書令下壺、車騎將軍郗鑒、護軍將軍庾亮、領軍將軍陸晔、丹陽尹溫嶠並受遺詔。輔太子。」とみえるので、明帝末年には、これらの人々が東晋政権の支えとして最も重要な人々であつたであらう。ところが、この中南人は僅かに陸晔一人にすぎない。勿論陶侃伝⁽⁶⁶⁾に、「暨蘇峻作逆。京師不守。……平南將軍溫嶠要侃同赴朝廷。初明帝崩。侃不在顧命之列。深以為恨。答嶠曰。吾疆場外將。不敢越局。嶠固請之。」とみえる如く、江南出身官僚の中には、当然顧命の列に入るに値する功績をたてたと自ら考える人々もあつたであらうし、又東晋朝廷からそれだけの信頼をうけていた人々もあつたことであらう。例えば、紀瞻伝⁽⁶⁸⁾に、「明帝嘗独引瞻於広堂。慨然憂天下曰。社稷之臣。欲無復十人。如何。因屈指曰。君便其一。瞻辭讓。」とみえる如きはそれであらう。

然るに、實際顧命の列に入つた人々は殆ど北人であつたのである。こゝろみると、明帝末年には、最早北方貴族の優越性はゆるぎなきものであつたかのであるが、実は、このことは必ずしもそんな優越性を示すものではないようである。

というのは、元帝以来江南有力者の代表的立場で東晋政権に密着していた人々は、例えば顧宋の如きは早くも元帝が晋王たる以前に卒し、賀

循は太興二年元帝在世中に卒し、薛兼は王敦反逆前に、紀瞻は王敦の乱後に夫々卒し、戴若思は王敦によつて殺されるという如くで、明帝末年には、東晋初頭以来の江南の代表的人物は殆ど死亡してしたのである。このように、明帝末年まで生存していれば、当然顧命の列に加えられるたであらうと考えられる人々が死亡したのであるから、従つて、出自としては寒賤に属したが、戦功のあつた陶侃が、前述の如く、江南官僚の代表として、自らも顧命の列に加えられるであらうと予期したのは決して不自然であつたとは考えられない。

このように考えると、明帝初年まで存命しており、且つ明帝末年まで壮健であれば恐らくは顧命の列に加えられたであらうと考えられる紀瞻、戴若思、薛兼を顧命を受けた人々に加えれば丁度十人^(西陽王を含まず)の杜稷の臣があつたことになるが、これは明帝が紀瞻に語つたところと大体合致するのであつて、これは決して偶然の合致とは考えられない。このことから、紀瞻、戴若思、薛兼等が杜稷の臣と考えられていたことが推測される。この場合、南人、北人の割合をみれば、北人五人^(西陽王を除いて)、南人四人となり、東晋初頭杜稷の臣とみられた人々はほぼ相半ばしたとしてよいのである。こうみると、元帝から明帝にかけての、東晋政権の基礎の固められた時期においては、東晋政権は同様な二本の柱——江南官僚と江北官僚——の上に立っていたとして、一向にさしかえないようである。

(二)

併しながら、東晋政権は、このような有力官僚のみによつて支えられていたものではない。現実には、そしてもっと大切なことは、東晋政権の實質的な支柱は寧ろ下層官僚にあつたであらう。そのことを想わしめるものは、元帝紀⁽⁶⁶⁾の建武元年⁽³²⁷⁾三月の条の、「辛卯即王位。大赦改元。……諸參軍并奉車都尉、掾属駙馬都尉。辟掾属百余人。時人謂之百六掾。」という記事である。これによれば、建武元年元帝が晋王となつ

た時、掾属百余人を辟召したようにとれるが、晋書（89）虞胤伝望の条によれば「元帝為丞相。招延四方之士。多辟府掾。時人謂之百六掾。」といっている。ところが、元帝が丞相になったのは愍帝建興四年（316）のことと思われるので（晋書88愍帝紀、晋書89元帝紀参照）、このような多くの掾属を召したのは、必ずしも或る時期に限ったものではなく、恐らくこれらの記事は、安東將軍、鎮東大將軍、左丞相、丞相（晋書86）の各時代を通じて辟召した掾属が百有余人の多きであったことを言ったものであろう。もしそう解しうれば、この掾属は、文字通りの將軍府、或は丞相府の掾或は属というだけではなく、前記事にいう參軍の如き僚属をも含めての広い意味での掾属百有余人があったとするものであろう。

而もそれらの辟召された人々が四方の士であったとすれば、それは必ずしも、限られた有力氏族出身者をあつめるというばかりではなく、その他に、有能な士を中央に集中するということであつたであらう。即ち、一面では有力氏族に属する人々を招いて地方とのつながりをつけると共に、他面では有能な人物を招いて人心を収攬するというやり方ではなかつたであらうか。即ち、それら掾属の招請は、単なる將軍府、丞相府の政務運営のためではなく、東晋新政権の基礎を、広い基盤—地域的にも、社会階層的にも—の上におく為の手段であつたと考えられる。そのことはこれから漸次実証されるであらう。かくて、元帝はその新政権の確立の為に、江北、江南それぞれの人士を広く招請したと思われるが、では、そのようにして集められた人々はどんな人々であり、東晋新政権とどのような關係を構成していたものであろうか。

先ず、元帝が晋王となる以前、元帝の府に召されて帝の周辺にあつた人々について、南、北に分けた表をつくってみよう。但し晋書列伝を中心としたものである。（中に一名の推定者を含んでいる）

表Ⅰ

| | |
|----|-----|
| 北人 | 46名 |
| 南人 | 31名 |

不明一名 計七十八名

表Ⅱ 出身地域

| 北人 | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|---|---|----|----|----|---|
| 郡国 | 泰山 | 彭城 | 濟陰 | 樂安 | 渤海 | 琅邪 | 潁川 | 陳 | 譙 | 太原 | 陳留 | 東萊 | 魯 |
| 人員 | 3 | 1 | 2 | 1 | 1 | 10 | 6 | 2 | 2 | 2 | 3 | 2 | 2 |
| 氏族 | 2 | 1 | 1 | 1 | 1 | 4 | 3 | 2 | 2 | 1 | 2 | 2 | 1 |

| 南人 | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|---|----|----|
| 郡国 | 義興 | 丹陽 | 豫章 | 堂邑 | 広陵 | 会稽 | 吳 | 長沙 | 廬江 |
| 人員 | 4 | 4 | 1 | 1 | 3 | 6 | 5 | 1 | 3 |
| 氏族 | 1 | 4 | 1 | 1 | 3 | 4 | 3 | 1 | 2 |

他に 不明 1

表Ⅲ 元帝との統属關係

| | | | | | | | | | | | | |
|----|----|------|------|---------|---------|----|----|----|----|---|----|---|
| 北人 | 參軍 | 軍諮祭酒 | 從事中郎 | 掾 | 長史 | 司馬 | 舍人 | 主簿 | 祭酒 | 屬 | 司直 | |
| 人員 | 20 | 16 | 10 | 5 | (推定を含む) | 4 | 3 | 3 | 3 | 2 | 2 | 1 |
| 南人 | 參軍 | 軍諮祭酒 | 掾 | 從事中郎 | 祭酒 | 司馬 | 長史 | 屬 | | | | |
| 人員 | 11 | 11 | 9 | (推定を含む) | 3 | 3 | 4 | 2 | 1 | | | |

| | |
|----|---|
| 不明 | 屬 |
| | 1 |

一応これら表Ⅰ、Ⅱ、Ⅲについて説明を試みよう。

元帝の府に召された人々は、表Ⅰにかがげる七十八名につきるものにはあるまい。これらは単に晋書によって知りえるものを掲げたにすぎないのであり、而も、王室に属するものは省いてあるからである。例えば、晋書（37）譙剛王遜伝承の条によれば、「元帝初鎮揚州。承暉建康。補軍諮祭酒。」とみえ、晋書（59）汝南王亮伝祐の条によれば、「永嘉末。以寇賊充斥。遂南渡江。元帝命為軍諮祭酒。」とみえてゐる。しかし、このような例は、元帝と江北、江南人士とのつながりを見る上には必要がないので省いてある。従つて、この表が非常に不完全な

ものであることは認めるが、しかしこれによっても、当時の大体の形勢を察するに不十分とは思えない。表によると、北人四十六名、南人三十一名、不明一名で計七十八名であるから、絶対数からみれば、北人が多いのはいうまでもないが、南人必ずしも少くはなく、ことに、南人の中には後に有力官僚となることもない為に、列伝中に記される機を失した人々がより多かったのではないかと想像されることから^(後述)、元帝周辺僚属の絶対数は南人、北人にそれほど差はなかったと考えても差支えないのではなからうか。

二、表Ⅱについて

この表によると、北人では琅邪出身が最も人員が多く、潁川がこれにつき、他は各地からであるが、矢張り中原地帯が多いことは否めない。併し、太原、范陽の如き北支那にも及ぶ広範囲に亘るものであった。

南人では、会稽、呉、丹陽、義興等が人員的に著しく、北方との境界線上の廬江から揚子江上流長沙に及ぶ広範囲に亘るものである。しかし、矢張り新都建康を中心とする揚子江下流地帯が中心であった。但し、これらは七十七名についての数字にすぎないので、ここに現れない多くの辺郡からの参加者があったことも予想されることである。

以上によって大観すれば、中原地帯は難を江東に避け易かった為に、その地の有力官僚或は豪族等が、続々と新政権に参加する機会を得たことが同われ、又、新政権を迎えた江南では、既に呉朝時代に有力官僚を多く出した会稽、呉、丹陽等の地方の有力者達が新政権に協力的であったことが推測される。

併し乍ら、これらの人々を出身氏族別にみれば、表Ⅱの下段の如くで、必ずしも人員の場合における如き偏りはみられない。琅邪でさえも僅かに四という数字にみる如くで、これは王氏一門の参加者が多かった為である^(後述参照)。南人の場合においても、新都建康の地元丹陽は、人員では劣っていても、氏の数では会稽と共に最も多い方であって、新政権と丹陽郡との密着の度合を示している。即ち、人員の多い郡が必ずしも

新政権と密着していたと即断はでき難いわけであって、氏族数を参照することによって、その地方と新政権との関係を考えねばなるまい。とすると、北方では琅邪、潁川、陳の地方、南方では会稽、丹陽、それに広陵、呉の地方が、より密接なつながりがあったようではあるが、一般的にいて、新政権は特にある地域の氏族、有力者に支持を求めたというよりも、各地の有力者の協力を得ようとしていたことが伺われるようである。

三、表Ⅲについて

この表の数字は、一人で表記の官職を遷転した場合もあり、それも亦計数したので実人員数を上廻っている。さて、これによって、晋王となる以前の元帝と、北人、南人の結びつきの在り方を察することができよう。表によれば、南人、北人共に参軍、軍諮祭酒が圧倒的に多いことが注目される。

参軍については、既に宮崎博士の詳説があるので^(「九品官人法の研究」第二編第三卷「南朝における諸品の発達」五、軍府僚属に参軍の発達の条参照)説明を省くが、これらの人々の中には、勿論正、行参軍があつて諸曹の事務を掌っていたと思われるが、何れにしても、建国前の元帝にとっては、政務的な仕事よりも、寧ろ純軍事的な意味での必要による招請が多かつたであろう。例えば晋書(76)王廙伝彬の条に、「元帝引為鎮東賊曹参軍、軹典軍参軍、豫討華軹功、封都亭侯」とみえる如く、参軍には軍事的な行動が要請せられていたものと思われる。或は又、元帝の時のことではないが、晋書(84)劉牢之伝によれば、「(謝)玄以牢之為参軍、領精銳為前鋒、百戰百勝、号為北府兵」とも見えていて、而もこの参軍が最も多人数であつたことは、その必要性和からみ合ひ、軍事能力のある者が招請されたであろうと推測できよう。

いま、初めに参軍として元帝に招請されたことの明かな人々についてみるに、

| 北人 | 王舒、王彬、劉胤、孔衍、周嵩、阮孚、羊曼、夏侯承 | 八名 |
|----|--------------------------|----|
|----|--------------------------|----|

南人 高俎、顧衆、張闔、陸玩、孔愉、虞預、任旭、周訪

八名

となっている。いま、これらの人々の軍事能力的な面について考えるに、

まず、北人については、王舒、王彬は共に琅邪王氏に属するが、一生を武将として過した人々である（晉書76王舒伝及同書 同書78王彬伝及同書）。劉胤も亦武将としての一生を送っている（顧胤伝）。孔衍の場合は、「元帝引為安東參軍。專掌記室。書令殷積。而衍每以称職見知」（孔衍伝）とある如く、参軍とはいえ、記室参軍として文筆に従ったようである。彼は孔子二十二世の孫といわれ、学者として知られていた（同）。周嵩は、「狷直果俠。每以才氣陵物。」（周嵩伝）といわれる如く、才気ある任俠の人物であったようで、これを彼が用いられた所以であろう。阮孚は、「元帝以為安東參軍。蓬髮飲酒。不以王務嬰心。」（阮孚傳）とある如く、元来浮華の徒であつたらしいが、「転丞相從事中郎。終日酣縱。恒為有司所按。帝每優容之。……嘗以金貂換酒。復為所司彈劾。帝宥之。」（同）とある如く、元帝は常にこれを許している。このことは、「時帝既用申韓以救世。而孚之徒。未能棄也。」とある如く、帝は後に刑名の術を以て政治をなしたこと例えば庾亮伝（庾亮傳）に、「時帝方任刑法。以韓子賜皇太子。亮諫以申韓刻薄傷化。不足留聖心。太子甚納焉。」とある如くであつたが、初めは、「初鎮江東。頗以酒廢事。」（元帝紀）といわれた帝であるので、なお孚の如き徒輩に対して愛着を感じていたのであろう。従つて、彼の参軍たりし事には、軍事能力は始めから期待されていなかったとしなければなるまい。次に羊曼については、「任達類縱。好飲酒。」（羊曼傳）といわれる如く、任達の子であつたらしいが、その親しい友人には温嶠、庾亮等があつたというし（同）、又、蘇峻の乱には前將軍として出陣して戦死している（同）ことからみて、阮孚の如きとは異つて、識見もあり、将才もあつた人物と考えねばなるまい。

以上北人については、その個人的活動について考え、彼等の出自につ

東晋初頭政權の性格の一考察

いては別に考察しなかった。それは彼等が、流寓の人々であるが故に、仮令郷里において豪門であつたとしても、それは直ちに江南における軍事能力として生きてくるわけではないからである。即ち、軍事能力を考える場合には、北人についてみた個人的能力の外に、その背後にある一族の軍事能力もあつた筈であるから、次に南人について考える場合には、この点についての考察も併せて行なつてみよう。

前述南人のうち、最も少く見つても、顧衆、陸玩、孔愉、虞預、任旭の五名、即ち八名中五名については、単に個人的能力のみならず、その一族の地方における社会的勢威、ひいてはその出身地を基盤とする軍事能力について注目すべきである。何故ならこれらの人々は、その出身地方における名門であり、その故に相当の軍事力を確保し得たと思われるからである。

まず、顧氏についてみるに、顧衆はその伝（顧衆傳）によれば、一生を主として武人として生活したようで、そのことから個人的な軍事的才能については疑いないところであらう。この顧氏が呉郡の名門であることは、彼が顧衆の一門であることによつても明かであるが（世宗表）、顧衆伝によつてみるも、蘇峻の反の時、「王師敗績。衆還呉。潜図義挙。時呉国内史庾冰奔于会稽。峻以蔡謨代之。……衆乃遣郎中徐機告謨曰。衆已合家兵。待时而奮。又与張慙期效節。謨乃檄衆為本国督護揚威將軍。……呉中人士。同時響應。」とその行動について記している如く、呉郡の義軍の中心として活動している。その彼の活動の支えとなつていたものは彼の家兵であつたであらう。このような、軍事活動を起しうる手兵、又呉郡を統一しうる社会的勢望、このようなものが顧氏の場合には見られるのである。

次に陸氏についてみるに、西晋時代の陸機、陸雲の一門で、呉朝の名門、呉郡随一の大家族であることはいうまでもない（陸機傳）。この陸玩に關して、「時王導初至江左。思結人情。請婚於玩。」（陸玩傳）とある記事は有名な記事であるが、これによつても当時の江南における陸氏の社会

的勢望を察することができよう。玩自身としては、その後殆ど文臣として活動しているから(同上)、参軍となったのは単なる本人の軍事能力或は事務処理能力よりも、その社会的地位に期待がかけられていたものと考えられる。

次に孔氏についてみるに、愉は殆ど中央官僚としての生活を送っており、戦乱に際しての活躍は見られない。併し、この家は世々呉朝の官僚として会稽の名門であった(孔愉伝)。彼が参軍に招請された時のことについて、彼の伝には、「信著鄉里。後忽捨去。皆謂為神人。而為之立祠。永嘉中。元帝始以安東將軍鎮揚土。命愉為参軍。邦族尋求。莫知所在。」と伝えている。これは彼が郷里の崇敬をうけていたことを物語るものであるが、他面、行不明衛の人物を参軍に召そうとした元帝の意図は、単なる愉の個人的才能ではなく、その社会的地位に期待するものがあつたからに相違ない。

次に虞氏についてみるに、これは会稽虞潭と同族で、会稽余姚の豪族であつた(地輿記「嘉祥官世系表」、晋書82「虞預傳」、虞預伝)。預は、元帝に丞相行参軍兼記室として用いられた後は、殆ど文臣、特に著作関係の任にあつて、軍事的には働いていない。しかし乍ら、その一門は、「会王含、沈充等攻逼京都。(虞)潭遂於本県。招合宗人及郡中大姓。共起義軍。衆以数万。自假明威將軍。乃進赴国難。」(虞預傳)とある如く、郡中の豪族達を糾合するだけの實力を有していたのであるから、安東從事中郎諸葛恢、参軍庾亮等が彼を元帝に推薦したのは(虞預傳)、単に彼の文筆の才があるといったことに止まる筈がない。とすれば、それは必ずや、その一族の社会的地位の故であつたと見るの外はない。

次に任氏についてみるに、その伝(任氏傳)によれば、旭は遂に固辞して参軍にはならなかつたのであるが、元帝が彼を召したことにについて、「尋天下大乱。陳敏作逆。江東名豪。並見羈繫。惟旭与賀循。守死不廻。敏卒不能屈。元帝初鎮江東。聞其名。召為参軍。」と見えている。陳敏の反の時の具体的な様子は不明であるが、任旭が陳敏の勢力をはねつけう

るだけの實力を郷党でもっていたことを証するものであろうか。彼が臨海郡の有力一門であつたことは、太守が彼を功曹にあげ、又彼が西晋時代に州郡によつて郡中正にあげられたことでも明かであろう(任旭傳)。とすれば、元帝が彼を召したのは、そのような社会的背景を考慮した上でのことであつたといつてよからう。

さて、これら以外の、高悝、張閭、周訪についてはどうであつたろうか。晋書(71)高悝伝によれば、悝の父悝は江州刺史華軼の吏であつたが、軼が元帝に征せられて敗れるに及んで悝の子をかくまっていたが、赦にあつて出てきて参軍に召され、遂に丹陽尹に至つたという。これだけではどのような意味で参軍に召されたかは明かでないが、恐らくは個人的な才能を見込まれたものであろう。

張閭はその伝(張閭傳)によれば、丹陽の人、呉の輔呉將軍張昭の子孫である。張昭及其の子承が、元来江北彭城の人でありながら南下して、呉朝の有力官僚家となり、孫氏政權の支えとなつたことは、呉志(7)張昭伝に明かである。従つて、張氏は丹陽に落ちつくことによつて完全に呉人としての名門となつた筈であるけれども、この閭に及んだ頃に、どのような社会的勢力をもっていたかについては明かでない。彼を元帝に薦めたのは太常薛兼であつたが、その時のことについて、「太常薛兼進之於元帝。言閭才幹貞固。当今之良器。」(張閭傳)と伝えているところでは、専らその人物についての如くであるが、併し、社会的地位がなかつたわけではなからう。彼はその後、文武何れにも活動しているので、或は個人的な軍事的能力も認められていたものであろうか。

最後に周訪についてみるに、その伝(周訪傳)によれば、彼は元来は汝南の周氏であつたが、漢末から難を避けて呉に仕えたようであり、当時は廬江尋陽にあつた。代々將軍の家であり、周訪自身も元帝の参軍となつた以後、専ら武人として活躍し、遂に東晋の名將といわれるほどであつた。従つて、訪が召されたのは、恐らくはその個人的軍事能力の故かとも考えられるが、併し、世々武將の家であつたのだから、その家の社会

さて、以上の如く考えてみるに、北人の場合は、その個人的、軍事的能力、或は事務処理能力、或は個人的な親しさ等種々の場合があったとしても、軍事的にみれば個人の能力が重んぜられたと考えられるのに対して、南人の場合は、勿論周訪、顧衆にみる如く、そのようなものも期待されなかつたわけではないにしても、その背後にある社会的勢望、在地的な軍事能力等が考慮されていたであろうことは疑いない。例えば、表Ⅲの数字をみるに、参軍の数は北人が相当に多いに拘らず、この初任において、寧ろ南人の方が多いのであって、このことは、参軍の招請が単なる個人的軍事能力のみではなく、江南豪族の軍事能力の利用という意味を含んでいたことを推察せしめるであらう。

さて、次に、同じく表Ⅲの軍諮祭酒についてみるに、祭酒というのは、宋書(39)「百官志上によれば、「祭酒 晋官也。漢吳王鼻為劉氏祭酒。夫祭祀以酒為本。長者主之。故以祭酒為称。漢之侍中、魏之散騎常侍。高功者竝為祭酒焉。公府祭酒蓋因其名也。」とある。祭酒がそういう意味だとすれば、公府の祭酒も相当地位の高いものであったに相違ない。勿論、元帝府の祭酒にも、東閣祭酒(晋書88)西閣祭酒(晋書78)儒林祭酒(唐書91)等があつたが、ここでは一番多数の、而も東晋政權樹立に最も関係ありと思われる軍諮祭酒のみを問題としたい。

いま、軍諮祭酒の地位についてみるに、王_{（晉）}頤佐_{（晉）}彬の条に、「元帝引為鎮東賊曹參軍。軹典軍參軍。……軹軍諮祭酒。」とみえており、或は前掲、譙王承、汝南王祐が江南に来った時、先ず軍諮祭酒に輔せられたこと等からみるに、參軍より一段上位にあつたものであらう。そのことに関連して、宋書（39）百官志上に、「其參軍則有諮議參軍二人。主諷議事。晉江左初置。因軍諮祭酒也。」とあるものを参照すべきであらう。即ち、江左において初めて置かれた諮議參軍は、一般の正行參軍とは別格の上位にあつたのであるが（元_{（晉）}第二編第九品官人法の附、_{（元）}第二編第三章職官の附）、その諮議參軍はこの軍諮祭酒が變化したものであるといふのであらう。勿論、胡母輔之伝

東晋初頭政權の性格の一考察

(49) によるに、「元帝以為安東將軍諮議祭酒。」とみえており、別に諮議祭酒になるものもあつたという。然らば、恐らくは、軍諮祭酒がすぐ
に諮議参軍に変化したのではなくて、軍諮祭酒の中に諮議祭酒が設けら
れ、それが諮議参軍となつたと考えられそうである。然るに、晋書(44)
盧領伝志の条によれば、志は西晋末成都王穎に召されて、「以志為諮議
参軍。」とある。すると西晋末既に諮議参軍は有在したことになる、宋
書百官志に「江左初置」というのは誤っているとせねばなるまい。それ
はとも角として、その諮議参軍と同格と考えられる軍諮祭酒は一般参軍
より上位にあつたものと考えられる。

では、軍諮祭酒とはどのような仕事に従ったものであろうか。その名称からみても、これが軍事関係のものであることは間違いないまい。而も漢、魏で侍中、散騎常侍の如き職掌の者が祭酒となつたとすると、それらは天子側近の相談役といつてもよいのであるから、軍諮祭酒は恐らく、元帝政治の顧問役、相談役―特に東晋初頭では軍事的な面における―という如き地位ではなかつたであらうか。そのことは、軍諮祭酒として元帝に仕えた人達をみても大体納得できそうである。いま、元帝の府において軍諮祭酒になつた主な人物をあげれば次の如くである。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|
| ○初任 (印は) | ○刁協 | ○光逸 | ○王澄 | ○荀闓 | ○荀遷 | ○祖納 | ○祖逖 | ○王恢 | ○王敦 | ○庾琛 | ○卞敦 | ○王彬 | ○虞潭 | ○薛兼 | ○賀循 | ○紀瞻 | 南人 |
| ○初任 (同上) | | | | | | | | ○華譚 | ○周玘 | ○任旭 | ○陸曄 | | | | | | 北人 |

この表をみるに、参軍の表と合致する人々もいるし、一族である人々も多い。併し、概してこちらの顔ぶれの方が豪華である。即ち、当時元帝周辺にあった人々の中でも、一流の人物が任ぜられた感がある。このことは、この軍諮祭酒の地位が極めて重視されていたことを裏書きするものであらう。

更に参軍の場合と比べて著しいことは、初任の数は北人が圧倒的に多

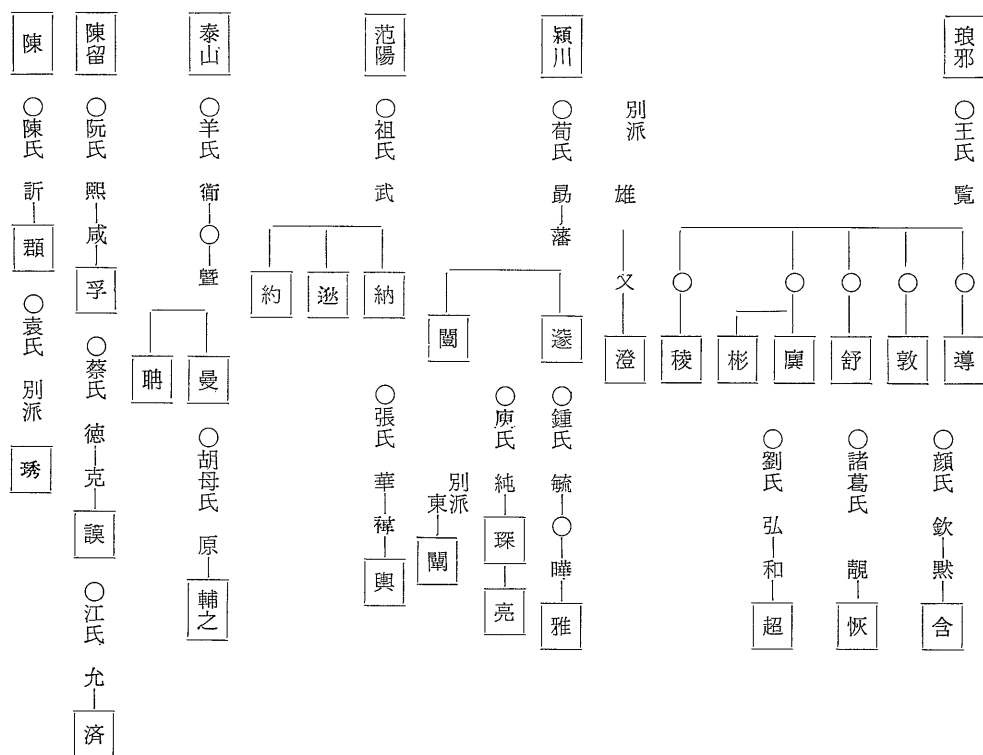
いことである。参軍では絶対数の少い南人は、北人とその初任において変らなかったのに、ここでは南人初任は僅かばかりである。このことは、参軍が直接、軍事能力(個人的或は一族として)につながるものであったことを考えれば、軍諮祭酒は寧ろそれらを動かしてゆく軍事的な指導の立場、即ち元帝の顧問的な立場にあったことを推察せしめるものではなからうか。

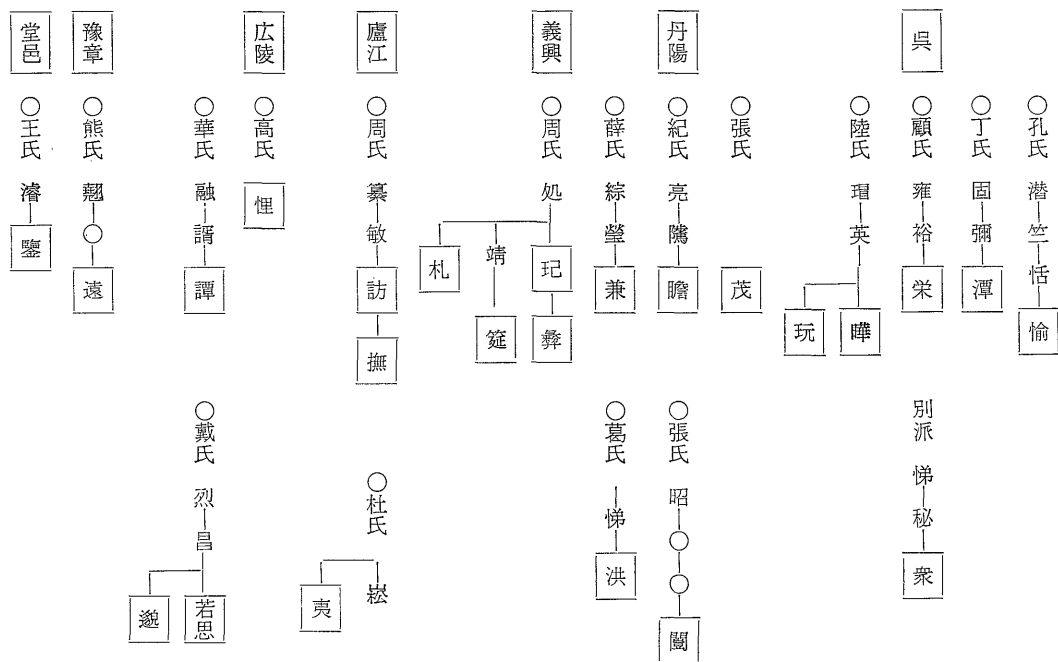
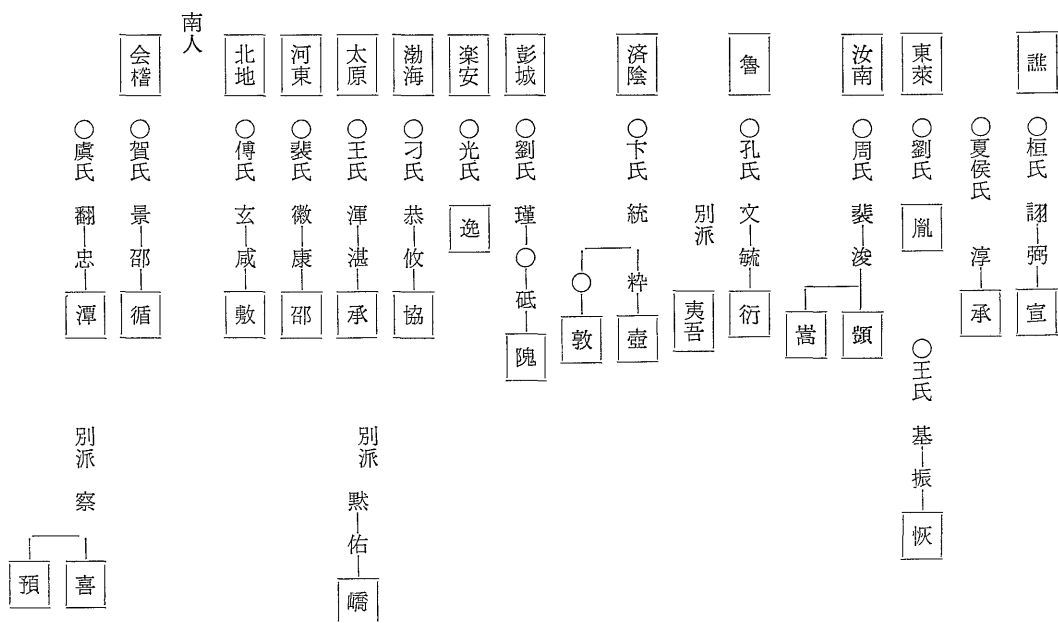
表Ⅲについては、なお従事中郎について説明しておくべきであろう。従事中郎は参軍の上にあつて元帝府諸曹を分掌するものであつたようであるが(宋書39百官志上参照)、元帝府の従事中郎の中には、選挙を掌つたものもあつたようである。勿論表Ⅲにみえる北人十、南人三の従事中郎すべてがそうであつたとは考えられないが、例えば、晋書100祖約伝をみるに、「後転従事中郎。典選挙。……司直劉隗劾之曰。約幸荷殊寵。顯位選曹。銓衡人物。」とみえ、晋書(70)卞壺伝には、「元帝鎮建鄴。召為従事中郎。委以選挙。甚見親仗。」とみえているところによれば、従事中郎の或るものは選挙を掌る仲々の要職であつたようである。而もこの頃の元帝府は既に事実上の東晋政權であり、その成立途上にあつたといえるから、その任務は平穩無事の時代の選挙とは異つて、特に重大であつたといわねばなるまい。その故にこそ、祖約、卞壺が殊寵を荷うといわれ、親仗せられた所以であらう。然るに、その従事中郎に限つて、前表にみる如く、北人就任の比重は頗る大であつたようである。勿論、これらの人々がすべて選挙を掌つたか否かは明かでないにしても、選挙に従つたことの明かな祖約、卞壺二人共に北人であることは、南人の招請が北人に比してそれほど人員的には劣つていたとは考えられないに拘らず、矢張りその底には北人重視の元帝の気持がみられるのではなからうか。

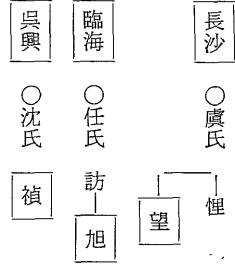
(三)

さて、次に表Ⅳ、表Ⅴを示そう。

表Ⅳ 出自(筆者撰(續晋百官世系表参照))
北人







表V 元帝時代（推定を含む）の活動

北人

| 人 | 名 | 主 要 経 歴 | 出典 |
|-----|---|-------------------------|----------|
| 王導 | 導 | 驃騎大將軍、司徒、丞相 | 65 本 伝 |
| 王敦 | 敦 | 大將軍、江州牧 | 98 本 伝 |
| 王舒 | 舒 | 尚書僕射、撫軍將軍、会稽内史、監浙江東五郡軍事 | 76 本 伝 |
| 王廙 | 廙 | 荊州刺史、左將軍、平南將軍 | 76 本 伝 |
| 王彬 | 彬 | 前將軍、江州刺史、尚書右僕射 | 76 王 廙 伝 |
| 王澄 | 澄 | 元帝府軍諮祭酒 | 43 王 戎 伝 |
| 王稜 | 稜 | 豫章太守、広武將軍 | 43 王 戎 伝 |
| 顏含 | 含 | 侍中、国子祭酒 | 88 本 伝 |
| 諸葛恢 | 恢 | 吏部尚書、尚書令 | 77 本 伝 |
| 劉超 | 超 | 左衛將軍、右衛將軍 | 70 本 伝 |
| 荀鑒 | 鑒 | 侍中、太常、尚書 | 39 荀 勗 伝 |
| 荀雅 | 雅 | 侍中、尚書 | 同 右 |
| 鍾雅 | 雅 | 御史中丞、侍中 | 70 本 伝 |
| 庾亮 | 亮 | 会稽太守、丞相諮祭酒 | 93 本 伝 |
| 庾闡 | 闡 | 司空、司徒、揚州刺史 | 73 本 伝 |
| 庾闡 | 闡 | 給事中 | 92 本 伝 |
| 祖納 | 納 | 光祿大夫 | 62 祖 遜 伝 |

| | | |
|------|---------------------|------------|
| 祖遜 | 豫州刺史、鎮西將軍 | 62 本 伝 |
| 祖約 | 侍中、豫州刺史、鎮西將軍 | 100 本 伝 |
| 張興 | 太子舍人 | 36 張 華 伝 |
| 羊曼 | 丹陽尹、前將軍 | 49 本 伝 |
| 羊聘 | 廬陵太守 | 49 本 伝 |
| 胡母輔之 | 揚武將、湘州刺史 | 49 本 伝 |
| 阮孚 | 吏部尚書、丹陽尹、鎮南將軍、廣州刺史 | 77 本 伝 |
| 蔡謨 | 掌吏部、太伝、司空、司徒 | 71 本 伝 |
| 陳頴 | 天門太守、梁州刺史 | 71 陳 頴 伝 |
| 袁琇 | 鎮東從事中郎 | 81 本 伝 |
| 桓宣 | 平北將軍、司州刺史 | 55 夏 侯 湛 伝 |
| 夏侯承 | 南平太守、散騎賞侍 | 81 本 伝 |
| 劉胤 | 平南將軍都督江州諸軍事 | 58 周 処 伝 |
| 王恢 | 鎮東將軍祭酒 | 69 本 伝 |
| 周顗 | 吏部尚書、尚書左僕射、護軍將軍 | 61 周 浚 伝 |
| 周嵩 | 御史中丞 | 91 本 伝 |
| 孔衍 | 広陵太守 | 91 孔 衍 伝 |
| 孔夷 | 太子左衛率 | 70 本 伝 |
| 卞壺 | 吏部尚書、領軍將軍、尚書令 | 70 卞 壺 伝 |
| 卞敦 | 安南將軍、広州刺史 | 69 本 伝 |
| 劉隗 | 丹陽尹、鎮北將軍都督青徐幽平四州軍事 | 49 本 伝 |
| 光逸 | 給事中 | 69 本 伝 |
| 刁協 | 尚書左僕射、尚書令 | 75 王 湛 伝 |
| 王承 | 鎮東府從事中郎 | 75 王 湛 伝 |
| 王嶠 | 大將軍參軍 | 75 王 湛 伝 |
| 裴邵 | 使持節都督揚州江西淮北諸軍事、東中郎將 | 35 裴 秀 伝 |
| 傅歟 | 鎮東從事中郎 | 47 傅 玄 伝 |

南人

| 人 | 名 | 主 要 経 歴 | 出 典 |
|-----|-----|--------------------|--------|
| 賀 循 | 賀 循 | 中書令、太常、行太子太傅 | 68 本 伝 |
| 虞 潭 | 虞 潭 | 会稽内史、侍中衛將軍 | 76 本 伝 |
| 虞 喜 | 虞 喜 | 不仕 | 91 本 伝 |
| 虞 預 | 虞 預 | 散騎常侍 | 82 本 伝 |
| 孔 愉 | 孔 愉 | 尚書僕射、鎮軍將軍、会稽内史 | 78 本 伝 |
| 丁 潭 | 丁 潭 | 廷尉、左光祿大夫領國子祭酒 | 68 本 伝 |
| 顧 榮 | 顧 榮 | 安東軍司馬加散騎常侍 | 76 本 伝 |
| 顧 衆 | 顧 衆 | 丹陽尹、侍中、尚書僕射 | 77 本 伝 |
| 陸 晔 | 陸 晔 | 領軍將軍、録尚書事、衛將軍 | 77 本 伝 |
| 陸 玩 | 陸 玩 | 吏部尚書令、尚書令、司空 | 78 本 伝 |
| 張 茂 | 張 茂 | 太子右衛率、吳興内史 | 68 本 伝 |
| 紀 瞻 | 紀 瞻 | 尚書右僕射、驃騎將軍 | 68 本 伝 |
| 薛 兼 | 薛 兼 | 丹陽尹、尚書領太子少傅 | 76 本 伝 |
| 張 闔 | 張 闔 | 廷尉、金紫光祿大夫 | 72 本 伝 |
| 葛 洪 | 葛 洪 | 散騎常侍領大著作 | 58 本 伝 |
| 周 玘 | 周 玘 | 吳興太守、建武將軍南郡太守 | 69 本 伝 |
| 周 筵 | 周 筵 | 冠軍將軍都督会稽吳興義興晉陵東陽軍事 | 58 本 伝 |
| 周 札 | 周 札 | 右將軍都督石頭水陸軍事 | 58 本 伝 |
| 周 彝 | 周 彝 | 丞相掾 | 58 本 伝 |
| 周 撫 | 周 撫 | 安南將軍荊州刺史 | 58 本 伝 |
| 杜 夷 | 杜 夷 | 鎮西將軍 | 91 本 伝 |
| 高 悝 | 高 悝 | 國子祭酒 | 71 本 伝 |
| 華 譚 | 華 譚 | 丹陽尹 | 52 本 伝 |
| 戴 邈 | 戴 邈 | 秘書監 | 69 本 伝 |
| 戴 若 | 戴 若 | 丹陽尹、尚書僕射 | 69 本 伝 |
| 戴 思 | 戴 思 | 征西將軍、驃騎將軍 | 69 本 伝 |

| | | |
|-----|----------------|----------|
| 熊 遠 | 侍中、会稽内史 | 71 本 伝 |
| 王 鑒 | 永興令、大將軍參軍 | 71 本 伝 |
| 虞 望 | 譙王承司馬 | 89 本 伝 |
| 任 旭 | 譙王承司馬 | 94 本 伝 |
| 沈 嶺 | 侍中、不就 元帝府參軍 | 68 賀 循 伝 |

さて、ここにあげた表Ⅳをみるに、ここでは表Ⅱにあげた数字の内容が明かとなる。

北人の場合、琅邪や潁川が特に多かったのは、琅邪王氏、潁川の荀氏、庾氏の如きが、一門にして二、三名或は六名という多数の人々を出したからである。又、江南でも、最も多い会稽には三名を出した虞氏があり、呉では顧氏、陸氏が夫々二名づつを出し、義興の四名は周氏のみである。従って、家としてみた時は、表Ⅱの下段にみる如き数字となる。

さて、この表によって北人の出自についてみるに、必ずしも西晋時代の有力官僚家を網羅しているわけではない。これらの家々の中、西晋時代相当の高級官僚家であったと見らるべきは、琅邪王氏、潁川荀氏、范陽張氏、泰山羊氏、濟陰卞氏、太原王氏、何東裴氏、北地傅氏の如きであろうか。これに対して、全くの寒門と目さるべき人々もあるので、泰山胡母氏、陳の陳氏、樂安光氏の如きはそうであろう。その他の人々は、地方では名門であるが中央では寒門と見られた范陽祖氏の如き、或は漢魏では栄えたが西晋では衰えてきた陳郡袁氏、而もこの場合の翽は袁氏の主流ではないらしい(拙稿「魏晉書」参照)。或は東晋以降は大いに栄えたが西晋までは平凡な官僚家に過ぎなかった潁川庾氏、譙郡桓氏の如き、前述二者の中間層とも見らるべき人々があった。

次に南人についてみるに、南人の多くは西晋においては不遇であったことは周知の如くであるから、出来る限り吳朝に遡って考えてみるに、会稽賀氏、同じく丁氏、呉の顧氏、同じく陸氏、丹陽紀氏、同じく薛

氏、同じく張氏、広陵華氏の如きは呉朝の有力官僚家であったように、同時に地方の豪門であった家も多かったであろう。（世説新語賞鑑）更に、会稽虞氏、義興周氏、呉興沈氏の如きは、夫々相当な官僚家でありながら、豪族性の強い一族であったことは明かである。（世説新語賞鑑）晋書82虞預傳、同書82周處傳、同書82虞預傳、同書82沈充傳、同書82虞預傳。これらに對して全くの寒門とみるべきは、豫章の熊氏にすぎなかったようである。

こうみえてくると、南北人を通じて、有力官僚家から全くの寒門出身者まで、あらゆる階層の人々が元帝の周辺に集められたことが明かである。勿論、北人の場合について考えれば、たまたま早く南下できた人々が集められたということもあったであろうが、南人においては、社会的勢力のある家に属する者に重点がおかれた如くではある。しかし、それと共に、ほぼ北人と同様に名門から寒門まであったことをみれば、遍く人材を集めるという元帝の基本的な考え方が、このような組み合わせを生んだと考えられよう。

以上のことは、南人においては、この表にあげた人物の外に、恐らくはもっと多くの人士が元帝の周辺に召されたであろうことによっても裏付けられた。例えば晋書(68)顧榮伝に、「時南土之士。未盡才用。榮又言。陸士光、貞正清貞。……甘季思、忠款尽誠。……殷慶元、質略有明規。……榮族兄公讓明亮守節。……会稽楊彥明、謝行言皆服膺儒教。……賀生沉潜青雲之士。陶恭兄弟。才幹雖少。實事極佳。凡此諸人皆南金也。書奏皆納之。」とみえていところでも明かであり、或は晋書(70)下壺伝によれば、明帝が東中郎將であった元帝即位前の時代に、下壺の上奏の一節に、「今東中郎岐嶷目然。神明日茂。軍司馬諸參佐。並以明德宜刀主事。壺之去留。曾無損益。賀循、謝端、顧景、丁深、傅暉等皆荷恩命。高枕家門。云々」と述べているが、これら明帝周辺の人々は元帝周辺にあったのではないが、これらの人々が元帝によって高選された人々であったことは下壺伝によって明かであるので、従って彼等は、形式的には明帝周辺にあったとはいえ、結局東晋初頭政権の周辺に

あったわけである。而もこれらの人々の中、北人は僅かに下壺自身及び北地の傅暉（世説新語賞鑑）にすぎず、他は皆南人であったのである。

このようにみれば、表IVにはみえない多くの南士が元帝周辺にあったことが明かであろう。いまあげた人々の中、陸士光は陸曄であり。賀生は賀循であろう。この二人は表にみえるが、他は表IVにみえぬだけでなく、甘季思即ち甘卓以外は列伝もない。従って、彼等がどのような出自の者か、元帝とどのような関係にあったかを知ることが仲々困難であるが、一応の説明を試みよう。

殷慶元については不明、顧公讓は顧謙で勿論顧榮の一門（「会稽百官世」系表）、楊彥明は或は会稽楊方（晋書88）の一門であろうか、謝行言は会稽謝沉（晋書82）の一門たること間違いないまい。陶恭兄弟というは、丹陽の陶回（晋書82）の一門たること間違いないまい。謝端は会稽謝氏に属するが（晋書82）、顧景は恐らく顧榮の一門であろうし、丁琛は会稽丁潭（晋書82）の一門であろう。

これらの人々は、元帝との間に、掾属或は参軍という形での関係をもったことがないとはいえない。勿論、列伝を有する甘卓も表IVにみえないのによれば、そう考えるのは早計の如くでもあるが、甘卓の伝（晋書82）によれば、彼は初めから元帝にその武略を認められて、前鋒都督揚威將軍歴陽内史として活躍したのであって、その故に元帝の周辺にあって表IVにのる如き官職につく暇がなかったのであろう。併し、その伝に記事が見えないからといって、必ずしも参軍、軍諮祭酒等にならなかったともいえないことは、例えば周筵は劉隗伝（晋書82）によれば、元帝の従事中郎となったこと明かであるのに、その伝（晋書82）にはそのような記述はなされていなくても明かである。ましてや、その後の事情によって列伝にのせられていない人々については何とも明言できないとはいえず、掾属や参軍として彼等が元帝の周辺に嘗てあったであろう可能性は十分に考えられるわけである。従って、表Iの条で言及した如く、表Iにおける南人の数は、実はもっと多かったと考え得るし、更に又、表IVにみえな

い会稽の名族謝氏、丹陽の名門甘氏、陶氏の如きも、顧、陸、賀、丁の諸族と共に、元帝周辺にあって東晋政權樹立への一翼を担ったと考えて差支えないであろう。

このように、南人の側においては、揚子江下流域の呉朝以来の名門、豪族が殆ど元帝周辺に招請されたということは注目すべきである。それは一面では、元帝が江南のあらゆる有力者の支持を確保しようとしたことを示すものであろう。そのことは例えば、元帝紀（晋書）建武元年七月の条に、「散騎侍郎朱嵩、尚書郎顧球卒。帝痛之。將為舉哀。有司奏。旧尚書郎不在舉哀之例。帝曰。衰乱之弊。特相痛悼。於是遂舉哀。哭之甚慟。」と見えているが、この顧球は呉郡顧榮の一門に間違いないであろうか。朱氏は、義陽、沛、晋陵、安陸等出身の朱氏があるが（「魏書」百官志系表一）及「晋書」52卷「顧球傳」參照。どこの朱氏に属するか明かでない。併し、或は朱陸顧張と呼ばれた呉郡の朱氏ではなかったであろうか。何れにしても、顧球が呉郡の顧氏と推定されるとした時、尚書郎は舉哀の例に非ずとして反対した有司の意見をおし切って舉哀した元帝の意図は何処にあったのであろうか。帝の舉哀の理由は、単に、「衰乱之弊。特相痛悼。」という誠にはっきりしない理由にすぎない。そのような理由ならば、如何なる官僚の死亡にも舉哀しなければならぬような争乱のつづいた時代である。然るに、この事件が特に本紀に記載されているのは、それが当時としては特例に属する事柄であつたからであらう。とすれば、元帝のつけた理由は表面的な理由であつて、真の理由はもっと外のところに、即ち、これらの人々の為に舉哀することによって江南人士の心をつかもうとするところにあつたのではなからうか。

東晋初頭政權の性格の一考察

上応星宿。敢有動者斬。帝為之改容。」と記しているが、この紀瞻の態度は、当時の江南人士の新政權に期待する氣持を示すものと考えてよさう。

次に表Vについてみよう。この表は各人の元帝時代における主要経歴（不明なものは推定）を記したもので、東晋初頭の新政權と、どのような結びつきをしたかを主眼として記した。従つて、仮に、「侍中、尚書」とあるときは、専ら内官ばかりで外官或は戰闘従事はなかったとするものではないが、主として内官にして中央政治に参加したもので、他は問題とするに足らぬという如き意味の記載の仕方である。

いま、この表によつて北人、南人の、東晋初頭政權との關係をみると、北人では王導を始めとして劉隗、刁協、卞壺、諸葛恢、顔含、荀邃、荀閭、庾亮等中央政務に従つた人々が圧倒的に多く、軍事面で活動したのは、王氏一族の敦、舒、廣、彬、祖氏一族の逖、約、それに桓宣の如きに過ぎない。

ところが南人では、主として中央政務に従つた者は、賀循、顧榮、陸暉、陸玩、紀瞻、薛兼、孔愉等可なりの数があるのであるが、併し、軍事的活動に従つた者は虞潭、顧衆、周処一族の玘、範、札、廬江の周訪、戴若思等があつて北人に比して多く、概括的に言えば、政治的には北人が有力であつた如くであるが、軍事的には南人が東晋政權の支柱であつた如くである。

而も、軍事面で北人の中心であつた王敦は、その一族王廙、王彬並に祖約等と共に、必ずしも東晋政權に忠実でなかつたことは明かな事実である（晋書93王敦伝、晋書76王廙伝、晋書80祖約伝）。勿論、南人でも周玘、周札等は必ずしも御し易い人々ではなかつたが、併し、周玘が企てたとされる陰謀は、「于時中州人士。佐佑王業。而玘自以為不得調。内懷怨望。復為刁協輕之。恥恚愈甚。時鎮東將軍祭酒東萊王恢亦為周顗所侮。乃與玘陰謀誅諸執政。推玘及戴若思。与諸南士共奉帝。以經緯世事。」（晋書93周玘傳）、と記されている如く、元帝をとり巻く執政者に対する反感こそあれ、元帝その人に対し

ては何等の反感ももっていないのであって、反って南人による元帝中心の政權樹立にその目的はあったのである。

又周札についても、彼が右將軍都督石頭水陸軍事であった時、王敦にせめられて、その城門を開いて王敦に応じたが故に王師は敗績した（晉書98）と伝えられるけれども、札が城門を開いたことの真意は、帝側にあって政を乱つた劉隗、刁協を除いて、眞の元帝の親政にもどすという王敦の揚言をそのまま信じたところに起ったことであるから、反ってこの事は、札が社稷に忠なる所以を示すものであるとする王敦の意見もあった（同上）。何れにしても、この南人の代表的豪族たる周氏の行動は、形式的には陰謀、反逆の形をとったとしても、それは王敦、祖約の反の如きと同日に論ずるには及ばぬものであった。

このようにみれば、中央政治に関しては矢張り北人を中心となり、南人はその軍事の実力が重んぜられたといえそうである。最初、元帝の周辺にあつて政治の実権を握っていたのは王導であるこというまでもない。併し、帝が踐阼するや、劉隗、刁協を信任して王導は漸く疎んぜられ（王導傳65）、王敦の威權が大きくなるや、帝は劉隗等の策を用い、譙王承、戴若思、劉隗等を地方に出してこれに備え（劉隗傳69）、遂に王敦は、「永昌元年敦率兵内向。以誅隗為名。」（王敦傳65）とか、「及王敦構逆。上疏罪協。」（刁協傳68）とかいわれる如く、この二人を討つを名として上言したのであった。即ち、即位前は王導等王氏一門にたより、即位後は劉隗、刁協二人を中心とする「刻碎之政」（晉書98）が行われ、「衆庶怨望之」（刁協傳69）するに至る政治が行われていたのであった。

併し乍ら、ここで注目しておくべきは、元帝即位前は王氏中心の政治であつたといひながらも、晋書（77）諸葛恢伝によれば、「于時王氏為將軍。而恢兄弟及顔含並居顯要。劉超以忠謹掌書命。時人以帝善任一国之才。」とあることである。即ち、元帝が鎮東大將軍たりし頃のこの記事は、一国即ち琅邪国の才能の士が東晋政權の支えとなつてゐることを示しているわけである。これら琅邪出身の人々は、王氏を中心として元

帝をもち立ててゆき、元帝も亦これを信任していたわけであろうが、「於是專擅之迹。漸彰也。」（王敦傳98）という如く王敦の専恣が漸く明かとなりつゝあつた即位前後から、琅邪出身官僚中心の政治が崩れ、北人官僚中心の政治に移行した如くである。

（四）

さてここで、南、北人の対立問題についてみるに、嘗て岡崎博士は、南北門閥間における不通婚の事実が政治的対立を生み、南朝社会に特有の門閥社会を生み出したとされたが、これに対して越智氏は、南、北門閥間の不通婚は、北方出身一流貴族と南方門閥との間にみられるものになぜないのであつて、北方出身一流貴族がその政治的優越性を保つ上から婚姻不通の事実が起つたものであるとされた（「南朝の貴族と」）。更に越智氏は、このことは決して彼等が個人的に親しくなかつたというのではなくて、個人的には相互に尊敬し、親しんでいたとしても、北方出身門閥はその政治的地位を確保する為には、南方門閥を抑制する立場を堅持せざるを得なかつたとされる。では、越智氏のこの意見は、東晋初頭の政治的、社会的動きの中で果して成立し得るであろうか。

さきに、元帝即位後は北人中心の政治が行われたであろうと推定したが、そのことは、政治が常に北人对南人という形で行われ、両者が常に対立的な關係にあつたということではない。例えば晋書（69）周顒伝に、「（王）敦既得志問導曰。周顒、戴若思南北之望。当登三司。無所疑也。導不答。又曰。若不三司。便应令僕邪。又不答。」とみえてゐるが、これによれば、王敦は北人周顒、南人戴若思は共に当然三公の地位に登るべき人物だと考えていたのであるが、これが当時の一般の人々の氣持でもあつたことは、同じ周顒の伝に、「（一参军）因謂敦曰。周家奕世令望。而位不至公。及伯仁（顒字也）。将登而墜。」といった記事が見えることでも察せられる。王導が王敦の質問に対して答えず、宛も王敦の意見を否定したかの如く見えるのは、決して彼がこの二人が三公

になるのに反対したが故ではなく、実は王導が周顒に対して誤解に基づく反感をもっていたからにすぎない(晉書⁶⁹周顒伝)。王導は後にその誤解であることが明かとなった時、「吾雖不殺伯仁。伯仁由我而死。幽冥之中。負此良友。」(同上)と反省しているのである。従って、王導、王敦には、政治的に南人、北人を区別し、又特に南人の三公進出を抑えようとする意図はなかったといつてよからう。

このことと関連して考えられるのは、晋書(73)庾亮伝に、「時王導輔政。主幼時艱。務存大綱。不拘細目。委任趙胤、賈寧等。諸將並不奉法。大臣患之。陶侃嘗欲起兵廢王導。而郗鑒不從。乃止。至是亮又欲率衆黜導等。又以諮鑒。而鑒又不許。」とある記事である。この記事によれば、成帝の時の王導輔政の態度に対して批判的であった庾亮(北人)が王導を黜けんとして郗鑒(北人)に相談してとめられたが、既に陶侃(南人)も嘗て同じく王導を廢せんとして郗鑒が従わなかったのを止めたという。この陶侃の時も郗鑒に挙兵を相談したと考えてよからう。

陶侃の場合はどのような理由で王導を廢せんとしたかは明かでないが、庾亮の場合は東晋政権の健全な発展の為に王導を黜けようとしたものであるから、陶侃の挙兵が北人郗鑒に相談せられたと考えられる以上、これも亦私利私欲から発したものとは考えられない。このように考えれば、東晋政権の確立、発展という立場で、陶侃(南人)、郗鑒(北人)、庾亮(北人)の三人は動いた筈で、彼等は南、北人の対立とか、それらの政治権力の移動とかいう立場で王導を批判したとは考えられないのである。

こうみてくると、東晋初頭の第一線政治家の動きは、事件の内容は前者、後者それぞれ異るとはいえ、南北対立の立場を超えている点では同一であろう。このような、南北の政治的対立を超えた立場で行動した人々の記録は随所に見受けられる。例えば、晋書(78)孔愉伝に、「于時刁協、劉隗用事。王導頗見疎遠。愉陳導忠賢有佐命之勲。謂事無大小。皆宜諮訪。由是不合旨。出為司徒左長史。」とみえるものは、南人の名

流であつて第一線政治家たる孔愉が、元帝の時、北人王導の為に弁じたものであり、これは東晋政権の確立発展という見地から、孔愉が王導を支持したものであろう。更に晋書(77)蔡謨伝によれば、「謨上疏讓曰。八座之任。非賢莫居。前後所用。資名有常。孔愉、諸葛恢。並以清節令才。少著名望。昔愉為御史中丞。臣尚為司徒長史。恢為会稽太守。臣為尚書郎。恢丹陽尹。臣守小郡。名輩不同。階級殊懸。」とみえている。これによれば、北人名門の蔡謨が、南人孔愉、北人諸葛恢を共に自らの先輩の名望として己れに比しているのであつて、少しもその間に、政治的な南人、北人の区別を感じさせない。而もその表現に、「名輩不同。階級殊懸。」といっているのは、北人名門の蔡謨の言葉であるだけに注目すべきであつて、ここでは南、北人の対立よりも、寧ろ一流官僚とその下にある官僚との関係、即ち社会的な相違よりも、官序における相違こそ問題とされているのである。

このようにみてくれば、前述した如く、東晋初頭の北人の政治的優越は動かないとしても、それは南、北を対立的に考えたことの結果としてできたものではなかったと考えられよう。即ち、北人が団結して、南人の政治的進出を抑えたというものではなかったわけであり、北人である元帝が、南下の事情もあつて、まず琅邪出身者を政治の中心におき、ついで北人を政治の中心においた自らなる心情の結果にすぎなかったであろう。

さて、南、北人の政治的対立は少くとも上層官僚の間においては見られなかったが、単に政治的のみならず、社会生活の上でも南北互に信頼し合った例が見られる。例えば晋書(68)紀瞻伝によるに、「尚書閔鴻、太常薛兼、広川太守河南褚沉、給事中宣城章遼、歴陽太守沛国武嘏。並与瞻素疎。咸藉其高義。臨終託後於紀瞻。瞻悉營護其家。為起居宅。同於骨肉焉。」とみえている。これらの中、閔鴻薛兼、章遼は南人、褚沉、武嘏は共に北人である。閔鴻は広陵の人(晋書⁶⁸薛兼伝)、薛兼はいうまでもなく丹陽の人(同上)で、共に元帝に仕えた南人の有力者である。これら

の人が紀瞻と平常疎遠であったというのは一見不可思議であるが、これは他面から言えば、南人官僚が北人官僚に対抗的な団結をしていなかったことの証でもある。更にこの記事は、これら南、北出身官僚達が、共に紀瞻にその後を托したという、誠に注目すべき事実を記している。即ち、北方のそれぞれの郷里において有力な家柄であった褚、武両氏、特に褚氏の如きは早く江南に来った人々が多かったに拘らず^{〔拙稿「東晋行官」世系表」参照〕}彼等はその後を一門の人々に托することなく、わざわざ平素疎遠であり且は南人でもあった紀瞻に托したのは、紀瞻その人の人物の立派であったが故であろうが、そのような社会的なつながりが成立するということは、南人、北人という意識を超えた人間信頼がなければならぬ。そのような人間的信頼が、南人相互の間のみならず、南人と北人との間にも成立していることは、当時の南、北人の間に、社会的な対立意識を超えうる機会があったとしなければならぬ。

而もこの場合更に重要なことは、これらの中、薛氏、紀氏の如きは南人中の名家であり且つ有力官僚家であるが、それに対し、河南褚氏も、北方出身の名門^{〔晋書32康寧傳〕}であったことであり、その一門の婚家は潁川の庾氏、潁川の荀氏、濟陰下氏、陳郡謝氏等である^{〔拙稿「東晋行官」世系表」参照〕}。褚氏は、この褚氏の主流ではないので別派に属すると思われるが、それにしてもこのような名門が、南方名門と上述のような社会的つながりをもったということは、政治的のみならず、社会的にも、有力名門の間において、南、北対立を超える結びつきが成立しつつあったことを意味するものである。

以上の如き南、北人の政治的、社会的關係を考慮しながら、例えば前にも引用したところであるが、例の義興周氏の陰謀について考えれば、「于時中州人士。佐佑王業。而玘自以為不得調。内懷怨望。復為刁協輕之。恥恚愈甚。時鎮東將軍祭酒東萊王恢亦為周顗所侮。乃與玘陰謀誅諸執政。推玘及戴若思。与諸南士共奉帝。以經緯世事。」^{〔晋書55周顗傳〕}とあるが、王恢は勿論北人であるので、この陰謀は必ずしも南人の反北人陰謀

とのみはいえず、寧ろ執權者に対する不平ある者の陰謀といわねばならず、その時たまたま南人が中心となったにすぎぬともいえよう。又、同じく周札の石頭城における失敗にしても、北人たる卞壺、或は郗鑒が痛烈な非難をあげたのに対し^{〔晋書周顗傳〕}、司徒王導が同じく北人でありながら、それらを反駁し、札を弁護して、遂に札に衛尉を贈っている^{〔同上〕}のをみれば、必ずしも南人対北人という意識のもとに、この南人周札の行動が論ぜられているとは考えられず、「如此札所以忠於社稷也」^{〔同上〕}と王導が評するところで明かな如く、東晋政權に対する忠、不忠の観点から、その行動は判断されているのである。

以上述べ来たところで明かな如く、南北的な対立感を超えて、東晋政權に対する忠誠によって批判する態度、名望を名望として官階的秩序を重視する態度、更には人間的信頼を寄せる態度、こういうものが南、北人相互間にみられたのであった。勿論、南人と北人の相反撥し合う史料を採そうとすればそれは誠に容易である。だからといって南北人が政治的、社会的に相対立したとなすのは早計である。既に一族内においてさえ互に排斥し合うことの行われた東晋時代である^{〔晉書55周顗傳〕}。まして南人の政治的進出の困難であった西晋に引きつづいて東晋初頭に、南、北人の間で相対立することの起るのは当然であろう。けれども、江北人士が江南に逃れ来た時、南人を抑えようという気持であったならば、東晋政權の確立は考えられないであろう。個々の衝突はあったにしても巨視的にみて東晋初頭の時代は最も江北人士と江南人士が融和的であった時代ではなかったであろうか。そのことは、なお明帝の時代においてすら、「太寧三年八月詔曰。……具時將相名賢之曹。有能纂修家訓、又忠孝仁義靜已守真。不聞于時者。州郡中正亟以名聞。勿有所遺。」とて、江南名門の子孫の挙用が考慮されているところによっても明かである。